

大学の世界展開力強化事業 構想概要 千葉大学

【構想の名称】(選定年度24年度・申請区分(Ⅱ)SENDプログラム)

ツイン型学生派遣プログラム(ツインクル)

【プログラムの目的・養成する人材像】

グローバルな教育能力と視点を持つ教員と、教育マインドを持つグローバル研究者の養成・開発である。実践的教育研究に取り組む院生と最先端科学研究に取り組む院生とのカップリングにより「人材開発型」の教育プログラムの構築をおこなう。

【構想の概要】

バックグラウンドが異なる研究科院生・学部生のツイン型学生派遣による協働促進カリキュラムを作成することで、ASEAN拠点大学での教育・研究活動による学位取得をも可能とする実践展開型授業プログラムを開発する。

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

○ グローバルジャパンカリキュラムの開発

本プログラム受講生のために、「グローバルジャパンカリキュラム」を新設し、院生・学生が取得した単位が卒業要件の履修単位として加算できるようにする。

○ 柔軟性に富んだコース設定

トライアル(2週間)・ショートコース(1ヶ月)を設定することで多くの院生が参加可能になり、活動に広がりを持たせ、ロングコース(6ヶ月)で深みのある教育研究活動を可能にする。

○ アクティブラーニングの推進とイングリッシュハウスの活用

アカデミック・リンク・センターと連携し、自由な学習空間、学習のためのコンテンツ、人的サポートを組み合わせた新しい学習環境の下、アクティブ・ラーニングを主体としたプログラム運用をする。また、学生が寛ぎながら、英語を話す・英語で学ぶ・発信する場—イングリッシュ・ハウス—を活用して英語力を強化する。



アカデミックリンクセンターにおける
アクティブラーニング

■ 交流プログラムの内容、今後の開始に向けた準備状況



インドネシアからの留学生をTAとして活用した
英語で行う実験講座(中・高校生対象)

○ 英語や現地語での実験講座プログラムの開発

「出る杭人材」のグローバル化支援のためにシンガポール国立教育研究所との連携のもと、英語による実験体験型科学学習プログラムの開発を進めるとともに、さらにプノンペン大学等とともにアジア地域で活用可能な現地語によるプログラム開発も開始している。

○ 学生交流協定の締結

インドネシアを中心とするASEAN諸国の伝統校と交流協定を締結し、ダブルディグリーを推進するとともに、共同研究体制を構築している。

■ 交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

平成24年度よりトライアルコースおよびショートコースでの派遣を開始する。ペアまたは4人程度のユニットでの派遣とし、初年度は40名、その後、各年度80名の派遣を行う。

○ 外国人留学生の受入れ

初年度は半期であり5名の受け入れを計画している。平成25年は授業に関する広報活動を行い、留学生の参加を呼びかけ、初年度の3倍となる16名程度の受講を目指す。

	H24	H25	H26	H27	H28
学生の派遣	40	80	80	80	80
学生の受入	5	16	16	16	16

注)申請時の計画

■ 日本人学生の派遣・留学生の受入を促進するための環境整備

○ 千葉大学IECオフィス専任スタッフと特任助教による支援体制

すでに千葉大学IECオフィスに専任スタッフを配置しており、さらに各拠点大学に専任コーディネーターを配置し、現地でのサポート体制を充実する。また、トライアル・ショートコース派遣期間は特任助教がASEANにおいて教育および生活指導を実施し、安全で効果的な活動を支援する。

○ International Support Desk (ISD) による受け入れ・派遣の一元管理

ISDが受け入れおよび派遣に関する手続きを一元的にワンストップサービスで行うことにより、留学生の入学から帰国までをサポートする。さらに部局では、学務事務には英語により相談が受け入れられる人材を配置し、留学生の増加に対応している。

■ 教育内容の可視化・成果の普及

○ シラバスの公開、ホームページによる情報提供、開発した教育プログラムの発信

学生の履修に関しては学務に関する専門秘書(アマヌエンシス)を配置し、支援体制を強化する。修了要件及びシラバスは印刷物及びホームページで公開し、透明性を確保する。開発した教育プログラムはシンポジウム等により広く公開する。

○ 外部評価委員会による評価

経済同友会教育交流部など経済界を含む外部評価委員による評価・提案を受けプログラムの先鋭化を図る。

大学の世界展開力強化事業 取組概要 千葉大学

【構想の名称】(選定年度24年度(申請区分(II)))

ツイン型学生派遣プログラム(ツインクル)

【プログラムの目的・養成する人材像】

拠点リーダーとして活躍しうる、グローバルな教育能力と視点を持つ教員と、教育マインドを持つグローバル研究者

【構想の概要】

実践的教育研究に取り組む院生と最先端科学研究に取り組む院生とのカップリングにより「人材開発型」の教育プログラムの構築をおこなう。バックグラウンドが異なる研究科院生・学部生のツイン型学生派遣による協働促進カリキュラムを作成することで、ASEAN拠点大学での教育・研究活動による学位取得をも可能とする実践展開型授業プログラムを開発する。

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

○ グローバルジャパンカリキュラム

ツインクル受講生は本カリキュラムの受講により英語力及び異文化コミュニケーション力を伸ばし、海外教員体験を効果的にする。取得した単位は卒業要件として加算できる。

○ 柔軟性に富んだコース設定

トライアル(2週間)・ショートコース(1ヶ月)を設定することで多くの学生が参加可能になり、活動に広がりを持たせ、ロングコース(~6ヶ月)で深みのある教育研究活動を可能にする。

○ アクティブラーニングの推進とCALLおよびイングリッシュハウスの活用

アカデミック・リンク・センターと連携し、自由な学習空間、学習のためのコンテンツ、人的サポートを組み合わせた新しい学習環境の下、アクティブ・ラーニングを主体としたプログラム運用をする。また千葉大学が開発したコンピュータを用いた英語学習システム「CALL」および新規開設したイングリッシュ・ハウスを活用して英語力を強化する。

■ 交流プログラムの内容、今後の開始に向けた準備状況

インドネシアの連携高校での授業風景



○ 英語や現地語での実験講座プログラムの開発

グローバルジャパンカリキュラムの中で最先端科学研究のアウトリーチ教材開発を行っている。また国際教育センターと協働し、日本文化・日本語教育について学習機会を提供している。シンガポール及びロンドン大学国立教育研究所、プノンペン大学等との連携のもと、英語・現地語による実験体験型科学学習プログラムの開発を進めている。

○ ツインクルプログラムにおける単位互換

平成25年度はグローバルジャパンカリキュラムを軸とした単位認定システムの構築を派遣活動が先行するインドネシアを中心に協定校と推進に向け協議する。

■ 交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

平成24年度はトライアルコースでの派遣により39名の学生をインドネシアおよびカンボジアに派遣した。今年度は派遣先をタイ、ベトナム、シンガポールに拡大し、80名の派遣を行う。

○ 外国人留学生の受入れ

平成25年は留学生受け入れ奨学金制度を活用し、グローバルジャパンカリキュラムの講座の中で最大100名の留学生受け入れを計画している。

インドネシアでの交流・研修活動



	H24	H25	H26	H27	H28
学生の派遣	39	80	80	80	80
学生の受入	0	16	16	16	16

注)H24は実績、H25以降は計画

■ 日本人学生の派遣・留学生の受入を促進するための環境整備

○ 千葉大学IECオフィス専任スタッフと特任助教による支援体制

千葉大学IECオフィスの専任スタッフおよび各拠点大学への専任コーディネーター配置により、現地でのサポート体制を確立した。さらに特任助教を4名に増員し、トライアル・ショートコース派遣期間は特任助教がASEANにおいて教育および生活指導を実施し、安全で効果的な活動を支援する。

○ International Support Desk (ISD) との連携によるツインクル学生交流の全学推進

ISDと協働し、留学生受け入れおよび派遣に関する学内体制を構築することにより、留学生の受け入れ促進を図る。

■ 教育内容の可視化・成果の普及

<http://www.twinkle.jp/>

○ シラバスの公開、ホームページによる情報提供、開発した教育プログラムの発信

学生の履修に関しては学務に関する専門秘書(アマヌエンシス)を配置し、支援体制を強化している。修了要件及びシラバスは印刷物及びホームページで公開しており、透明性を確保している。開発した教育プログラムは報告会等により広く公開する。

○ 外部評価委員会による評価

経済同友会教育交流部など経済界を含む外部評価委員による評価・提案を受け、プログラムの先鋭化を図る。

インドネシアの大学および中・高校教員を交えた
第1回ツインクル活動成果報告会



大学の世界展開力強化事業 取組概要 千葉大学

【構想の名称】(選定年度24年度(申請区分(Ⅱ)))

ツイン型学生派遣プログラム(ツインクル)。

【プログラムの目的・養成する人材像】

拠点リーダーとして活躍しうる、グローバルマインド持つ教員と、教育マインドを持つグローバル研究者。

【構想の概要】

実践的教育研究に取り組む院生と最先端科学研究に取り組む院生とのカップリングにより「人材開発型」の教育プログラムの構築を行う。バックグラウンドが異なる研究科院生・学部生のツイン型学生派遣による協働促進カリキュラムを作成することで、ASEAN拠点大学での教育・研究活動による学位取得をも可能とする実践展開型授業プログラムを開発する。

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

○ ツインクルコンソーシアムの設立と連携大学の拡大

ツインクルプログラムにおける学生交流の充実を図るために、ツインクルコンソーシアムを設立し、連携大学とプログラム内容について協働的に改善を行った。また、ツインクルコンソーシアム連携大学を5カ国10大学から12大学に拡大した。

○ MOAの締結とツインクルプログラムにおける単位の相互認定

ツインクルプログラムの円滑な実施のために、連携大学とMOAの締結を行った。これにより、単位の相互認定方法の確認や本プログラム運営上の双方の役割を明確にした。

○ アクティブラーニングによる科学授業の開発

本学の理系・教育の学生がユニットを組み、彼らが、アカデミック・リンク・センター等を活用したアクティブラーニングにより、ASEANの児童・生徒向け科学教材・授業を開発した。理系および教育を専門とする教員をそれぞれ1名ずつ各学生ユニットに割り当て、指導内容と指導方法の両観点から学生の授業づくりを指導する「Wメンター制」を確立した。

〈第3回ツインクルコンソーシアム会議・第2回ツインクル活動成果報告会〉



■ 交流プログラムの内容、今後の開始に向けた準備状況

〈実験活動を取り入れた科学授業の様子〉



○ 科学研究の教材化および授業実践を通じた国際交流

ユニットを組んだ本学学生が、ASEAN連携大学学生との協働を通じて、自らの研究成果を基に授業を開発する。現地では、小・中・高・大の教員と児童・生徒・学生と交流するとともに、学校で英語により科学授業を実施する。

○ “双方向”ツインクルの実施

ASEAN連携大学の学生が、日本の小・中・高校において、児童・生徒に向けて授業実習や課題研究へのアドバイスを行う。この活動を通して、日本への理解を深めるとともに、若い世代同士の関係作りを促し、将来に渡るパートナーシップを形成する。

■ 交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

平成24年度はトライアルコース(2週間)のみ39名で実施した。平成25年度はプログラムを拡大し、トライアルコース59名、ショートコース(1ヶ月)14名、ロングコース(3ヶ月)3名の計76名を派遣した。平成25年度は、政治情勢によりタイ派遣を中止したが、インドネシアを代替地として実施した。

○ 外国人留学生の受入れ

平成25年度は、84名(91人月)の学生受入れを実施した。平成26年度以降も、双方向ツインクルを実現するために、最大100人月に拡大して受入れを計画している。

	H24	H25	H26	H27	H28
学生の派遣	39	76	84	84	84
学生の受入	0	84	20	20	20

注) H24・H25は実績、H26以降は計画

■ 日本人学生の派遣・留学生の受入を促進するための環境整備

○ 千葉大学IECオフィス専任スタッフと特任助教による支援体制

ASEAN拠点大学に配置されている千葉大学IECオフィスの専任スタッフと連携し、現地でのサポート体制を強化した。学生派遣期間は、特任助教がASEANにおいて、学生の教育および生活指導を実施し、安全の確保と支援の充実を図った。

○ ツインクルオフィスとInternational Support Desk (ISD)との連携によるツインクル学生交流の全学推進

留学生の生活面でのサポートを充実させるために、ツインクルオフィスとISDが連携し、留学生の受入れに関する学内体制を構築した。

■ 教育内容の可視化・成果の普及 <http://www.twinkle.jp/>, <https://www.facebook.com/twinkle.educ?fref=ts>

○ シラバスの公開、ホームページ・facebook・twitterによる活動内容についての情報発信と参加学生間の交流促進

本プログラムの修了要件およびシラバスを、印刷物およびホームページで公開しており、透明性を確保している。facebookやtwitterにより活動内容について情報発信している。これらは、本学学生とASEAN連携大学学生の交流の場ともなっている。

大学の世界展開力強化事業 H26取組概要 千葉大学

【構想の名称】(選定年度24年度(申請区分(II)))

ツイン型学生派遣プログラム(ツインクル)

【プログラムの目的・養成する人材像】

拠点リーダーとして活躍しうる、グローバルマインド持つ教員と、教育マインドを持つグローバル研究者。

【構想の概要】

実践的教育研究に取り組む院生と最先端科学研究に取り組む院生とのカップリングにより「人材開発型」の教育プログラムの構築を行う。バックグラウンドが異なる研究科院生・学部生のツイン型学生派遣による協働促進カリキュラムを作成することで、ASEAN拠点大学での教育・研究活動による学位取得をも可能とする実践展開型授業プログラムを開発する。

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

○ 文理融合教育でのアクティブラーニングによる科学授業の開発

本学の理系と教育の学生がユニットを組み、文理融合での授業開発および教員インターンシップを行った。アカデミック・リンク・センター等を活用したアクティブラーニングにより、学生が主体的にASEANの児童・生徒向け科学教材・授業を開発した。

○ グローバルジャパンカリキュラムによる単位認定

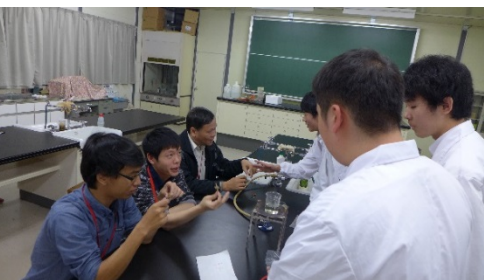
ツインクル活動により認定された単位は、では卒業要件としても活用可能である。

○ ツインクルコンソーシアム連携大学の拡大

学生交流の充実を図るために、MOA締結を進めつつツインクルコンソーシアム加盟校を5カ国、12大学、30高校に拡大した。

■ 交流プログラムの内容、今後の開始に向けた準備状況

〈ASEAN留学生による日本の高校での科学教育活動〉



○ 最先端の科学研究を教材化。そして科学・技術文化を通じた国際交流

○ ASEAN諸国の延べ12,000人の児童生徒が受講

ユニットを組んだ本学学生が、ASEAN連携大学学生との協働を通じて、自らの研究成果を基に授業を開発した。現地では、小・中・高・大の教員と児童、生徒、学生と交流するとともに、学校で英語により科学授業を実施した。

○ “双方向”ツインクルの実施

ASEAN連携大学の学生が、日本の小・中・高校において、児童・生徒に向けて授業実習や課題研究へのアドバイスを行った。この活動を通して、日本への理解を深めるとともに、若い世代同士の関係作りを促し、将来に渡るパートナーシップを形成した。

〈千葉大学学生によるインドネシアでの科学授業〉



■ 交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

平成26年度はトライアルコースを中心に84名を派遣した。タイの政治情勢が好転したため、計画通り派遣が実施できた。これにより連携5カ国12大学すべてにおいてプログラム実施体制が確立された。

○ 外国人留学生の受入れ

平成26年度は、67名(95人月)の学生受入れを実施した。H25年度は2週間のショートコースが主だったが、H26年度は18人がロングコースでの受け入れであり、各研究室での共同研究を推進した。

■ 日本人学生の派遣・留学生の受入を促進するための環境整備

○ 千葉大学IECオフィス専任スタッフと特任助教による支援体制

ASEAN拠点大学に配置されている千葉大学IECオフィスの専任スタッフと連携し、現地でのサポート体制を強化した。学生派遣期間は、特任助教がASEANにおいて、学生の教育および生活指導を実施し、安全の確保と支援の充実を図った。

○ ツインクルオフィスとInternational Support Desk (ISD)との連携によるツインクル学生交流の全学推進

留学生の生活面でのサポートを充実させるために、ツインクルオフィスとISDが連携し、留学生の受入れに関する学内体制を構築した。

■ 構想の実施に伴う大学の国際化の状況

情報の公開・成果の普及

○ ASEAN大学との新規共同研究、合同プログラム開発の拡大

ASEANと千葉大学の教育系および理系研究室間で新たな共同研究が始まっている。さらに大学院レベルでの合同カリキュラム開発が進んでいる。

○ ASEAN学生の大学院入学

ASEANのツインクル体験者が日本の教育の先進性を認め、千葉大学を始めとする日本の大学院への進学を決めている。

○ シラバスの公開、ホームページ・facebook・twitterによる活動内容についての情報発信と参加学生間の交流促進

本プログラムの修了要件およびシラバスを、印刷物およびホームページで公開しており、透明性を確保している。facebookやtwitterにより活動内容について情報発信している。これらは、本学学生とASEAN連携大学学生の交流の場ともなっている。

	H24	H25	H26	H27	H28
学生の派遣	39	76	84	96	96
学生の受入	0	84	67	28	28

注)H24-H26は実績、H27以降は計画

大学の世界展開力強化事業 H27取組概要 千葉大学

【構想の名称】(選定年度24年度(申請区分(II)))

ツイン型学生派遣プログラム(ツインクル)

【プログラムの目的・養成する人材像】

拠点リーダーとして活躍しうる、グローバルマインド持つ教員と、教育マインドを持つグローバル研究者。

【構想の概要】

実践的教育研究に取り組む院生と最先端科学研究に取り組む院生とのカップリングにより「人材開発型」の教育プログラムの構築を行う。バックグラウンドが異なる研究科院生・学部生のツイン型学生派遣による協働促進カリキュラムを作成することで、ASEAN拠点大学での教育・研究活動による学位取得をも可能とする実践展開型授業プログラムを開発する。

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

○ 文理融合教育でのアクティブラーニングによる科学授業の開発

本学の理系と教育の学生がユニットを組み、文理融合での授業開発および教員インターンシップを行った。アカデミック・リンク・センター等を活用したアクティブラーニングにより、学生が主体的にASEANの児童・生徒向け科学教材・授業を開発した。

○ グローバルジャパンカリキュラムによる単位認定

ツインクル活動により認定された単位は、では卒業要件としても活用可能である。

○ ツインクルコンソーシアムによる国際科学教育シンポジウム開催

ツインクルコンソーシアム加盟校5カ国、12大学、30高校に加え、協力校であるフィリピンのサンカルロス大学教員も交え、教育に関するシンポジウムを開催した。

■ 交流プログラムの内容、今後の開始に向けた準備状況

〈千葉大学学生によるインドネシアでの科学授業〉



〈ASEAN留学生による日本の高校での科学教育活動〉



○ 最先端の科学研究を教材化。そして科学・技術文化を通じた国際交流

○ ASEAN諸国の延べ16,000人の児童生徒が受講

ユニットを組んだ本学学生が、ASEAN連携大学学生との協働を通じて、自らの研究成果を基に授業を開発した。現地では、小・中・高・大の教員と児童、生徒、学生と交流するとともに、学校で英語により科学授業を実施した。

○ NEXTツインクルへ向けたコンソーシアム加盟大学の提案

「国際科学教育シンポジウム」を開催し、千葉大学教員に加えASEAN連携大学・高校教員がそれぞれの立場から当該プログラムと科学教育の未来像について発表をおこない、討議した。この場で各国からさまざまなNEXTツインクルの提案がなされ、支援終了後のプログラム実施に関して具体化が進んだ。

■ 交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

平成27年度はトライアルコースを中心に90名を派遣した。タイにおいてテロが発生したため、計画を一部変更し実施した。さらに支援終了後の新体制としてジョイントスーパービジョン体制を一部試行した。

	H24	H25	H26	H27	H28
学生の派遣	39	76	84	90	96
学生の受入	0	84	67	59	28

注)H24-H27は実績、H28以降は計画

○ 外国人留学生の受入れ

平成27年度は、59名(78人月)の学生受入れを実施した。ロングコース受け入れでは、大学院のジョイントスーパービジョンによる共同研究成果として国際研究論文の掲載が実現した。

■ 日本人学生の派遣・留学生の受入を促進するための環境整備

○ 千葉大学IECオフィス専任スタッフと特任助教による支援体制

ASEAN拠点大学に配置されている千葉大学IECオフィスの専任スタッフと連携し、現地でのサポート体制を強化した。学生派遣期間は、特任助教がASEANにおいて、学生の教育および生活指導を実施し、安全の確保と支援の充実を図った。

○ ツインクルオフィスとInternational Support Desk (ISD)との連携によるツインクル学生交流の全学推進

留学生の生活面でのサポートを充実させるために、ツインクルオフィスとISDが連携し、留学生の受入れに関する学内体制を構築した。

■ 構想の実施に伴う大学の国際化の状況

情報の公開・成果の普及

○ ASEAN大学との新規共同研究、合同プログラム開発の拡大

ASEANと千葉大学の教育系および理系教員による研究発表会が開催され、これに基づく国際共同研究が進行中である。さらに大学院レベルでの合同カリキュラム開発や院生のみならず現職教員のための研修プログラム開発が進んでいる。

○ ASEAN学生の大学院入学

ASEANのツインクル体験者が日本の教育の先進性を認め、千葉大学を始めとする日本の大学院への進学を決めている。

○ シラバスの公開、ホームページ・facebook・twitterによる活動内容についての情報発信と参加学生間の交流促進

本プログラムの修了要件およびシラバスを、印刷物およびホームページで公開しており、透明性を確保している。facebookやtwitterにより活動内容について情報発信している。これらは、本学学生とASEAN連携大学学生の交流の場ともなっている。

大学の世界展開力強化事業 H28取組概要 千葉大学

【構想の名称】(選定年度24年度(申請区分(II)))

ツイン型学生派遣プログラム(ツインクル)

【プログラムの目的・養成する人材像】

拠点リーダーとして活躍しうる、グローバルマインド持つ教員と、教育マインドを持つグローバル研究者。

【構想の概要】

実践的教育研究に取り組む院生と最先端科学研究に取り組む院生とのカップリングにより「人材開発型」の教育プログラムの構築を行う。バックグラウンドが異なる研究科院生・学部生のツイン型学生派遣による協働促進カリキュラムを作成することで、ASEAN拠点大学での教育・研究活動による学位取得をも可能とする実践展開型授業プログラムを開発する。

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

○ 文理融合教育でのアクティブラーニングによる科学授業の開発

本学の理系と教育の学生がユニットを組み、文理融合での授業開発および教員インターンシップを行った。アカデミック・リンク・センター等を活用したアクティブラーニングにより、学生が主体的にASEANの児童・生徒向け科学教材・授業を開発した。

○ グローバルジャパンカリキュラムによる単位認定

ツインクル活動により認定された単位は、卒業要件としても活用可能である。

○ ツインクルコンソーシアムによる国際科学教育シンポジウム開催

ツインクルコンソーシアム加盟5カ国、12大学、30高校に加え、協力大学であるタイ・チェンマイ大学、フィリピン・サンカルロス大学、パンガシナン州立大学、台湾市販大学教員も交え、教育に関するシンポジウムを開催した。

■ 交流プログラムの内容、今後の開始に向けた準備状況

〈ASEAN学生との協働による授業開発〉

○ 最先端の科学研究を教材化。そして科学・技術文化を通じた国際交流

○ ASEAN諸国の延べ16,000人の児童生徒が受講

ユニットを組んだ本学学生が、ASEAN連携大学学生との協働を通じて、自らの研究成果を基に授業を開発した。現地では、小・中・高・大の教員と児童、生徒、学生と交流するとともに、学校で英語により科学授業を実施した。

○ NEXTツインクルへ向けたコンソーシアム加盟大学の提案

「国際科学教育シンポジウム」を開催し、千葉大学教員に加えASEAN連携大学・高校教員がそれぞれの立場から当該プログラムと科学教育の未来像について発表をおこない、討議した。この場で各国からさまざまなNEXTツインクルの提案がなされ、支援終了後のプログラム実施に関して具体化が進んだ。

〈カセサート大学附属高校でのDNA抽出実験授業〉



■ 交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

平成28年度はトライアルコースを中心に73名を派遣した。タイにおいてテロが発生したため、計画を一部変更し実施した。さらに支援終了後の新体制としてアーカイブ教材による実験授業実施を一部試行した。

○ 外国人留学生の受入れ

平成28年度は、36名の学生受入れを実施した。ロングコース受け入れでは、大学院のジョイントスーパービジョンによる共同研究が進むとともに、教員間の新たな教育に関する国際共同研究の成果として研究論文の掲載が決定した。

■ 日本人学生の派遣・留学生の受入を促進するための環境整備

○ 千葉大学IECオフィス専任スタッフと特任助教による支援体制

ASEAN拠点大学に配置されている千葉大学IECオフィスの専任スタッフと連携し、現地でのサポート体制を強化した。学生派遣期間は、特任助教がASEANにおいて、学生の教育および生活指導を実施し、安全の確保と支援の充実を図った。

○ ツインクルオフィスとInternational Support Desk (ISD)との連携によるツインクル学生交流の全学推進

留学生の生活面でのサポートを充実させるために、ツインクルオフィスとISDが連携し、留学生の受入れに関する学内体制を構築した。

■ 構想の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開・成果の普及

○ ASEAN大学との新規共同研究、合同プログラム開発の拡大

ASEANと千葉大学の教育系および理系教員による研究発表会が開催され、これに基づく国際共同研究が進行中である。さらに大学院レベルでの合同カリキュラム開発や院生のみならず現職教員のための研修プログラム開発が進んでいる。

○ ASEAN学生の大学院入学

ASEANのツインクル体験者が日本の教育の先進性を認め、千葉大学を始めとする日本の大学院への進学を決めている。

○ シラバスの公開、ホームページ・facebook・twitterによる活動内容についての情報発信と参加学生間の交流促進

本プログラムの修了要件およびシラバスを、印刷物およびホームページで公開しており、透明性を確保している。facebookやtwitterにより活動内容について情報発信している。これらは、本学学生とASEAN連携大学学生の交流の場ともなっている。

	H24	H25	H26	H27	H28
学生の派遣	39	76	84	90	73
学生の受入	0	84	67	59	36